在日ブラジル人と日系新宗教

── ニューカマー外国人と宗教Ⅰ ──

樋　口　直　人

1．ニューカマー外国人の増加と宗教

80年代後半以降進んだニューカマー外国人の増加にともなうエスニック文化の定着は，宗教においてより顕著にみられる。一般に，地理的移動は宗教に対する需要を増大させる契機になる（Warner, 1993)。カトリックやプロテスタントを中心とするキリスト教，南アジア出身者を中心とするイスラム教などの事例をみればわかるように，日本においても宗教はコミュニティ形成にあたって大きな力となっている（樋口，1997)。これは在日ブラジル人においても同様であり，カトリック以外にも日系新宗教で集団形成が進んでいる。

しかしながら，現象の広がりに比して実態は知られておらず，ニューカマー外国人の宗教に対する先行研究はほとんど存在しない(1)。そのため，以下では在日ブラジル人に対する新宗教教団の受け入れとそれを介した活動を取り上げる。これを手始めに，ニューカマー外国人に対する宗教教団の受け入れ体系と，宗教を介した活動の実態を，何回かにわたって紹介していきたい。

ブラジルでの日系人は，かなり多様な宗教帰属を示している。88年に行われた調査の結果は，表1のようになっている。カトリックが最も多いことは明らかだが，日系宗教がそれに次いで4分の1を占めている(2)。これらの宗教は，在日ブラジル人の間でも継続して活動がなされている。特にカトリックの活動が最も活発であるが，本稿では日系新宗教について検討していきたい(3)。

表1　ブラジル日系人の宗教分布

宗　教	男	女	都　市	農　村	全体(%)
カトリック	57.65	60.80	60.79	45.54	59.19
プロテスタント	3.18	3.04	2.71	6.61	3.12
日系宗教	24.20	25.69	23.36	38.17	24.90
な　し	12.84	8.20	10.85	8.77	10.64
その他	2.09	2.25	2.29	0.88	2.14

出所：日本移民80年編纂委員会編，1991，442頁。

調査にあたっては，ブラジルにおける日系新宗教に関する先行研究を参考に（ブラジル日本移民80年史編纂委員会［1991］，井上他［1994］，前山［1997a］［1997b］），合計で9教団にインタビューを依頼した。そのうち，在日ブラジル人信者がいない修養団奉誠会を除く，金光教，崇教真光，生長の家，創価学会，天理教，パーフェクトリバティー(PL)教団，霊友会，MOA(Mokichi Okada Association）に対して，1996年7月～97年9月にインタビュー調査を行った（ただし，生長の家は郵送調査，MOAは世界救世教の上部団体)。崇教真光と創価学会については，教団の行事に参加する機会を得ることができた。インタビューに当たっては，特に教団による受け入れ形態と教団を介した信者の活動を中心に聞き取りを行った。なお，以下で挙げる数字は，すべて調査時点での値に基づく。

2．新宗教教団の特性と分類

在日外国人に関連する他の宗教と比較してみたとき，日系新宗教は表2のような特徴を持つ。日系新宗教の場合，現在でも日本からブラジルへの布教が行われている点で，他の宗教とは異なる。このことは，基本的には宗教を介した集団形成を促進すると思われる。第1に日本社会で存在する教団組織が受け入れの基盤になり，第2に日本発祥の新宗教では日本での活動自体が研修としての意味を持つからである。

表2　ニューカマー外国人を組織している宗教の分類

	日本からの布教あり	日本からの布教なし
日本社会での受け入れの基盤＝強	日系新宗教	カトリック，プロテスタント
日本社会での受け入れの基盤＝弱		イスラム教，南方上座部仏教，道教

このように集団形成の条件が相対的に整っている新宗教であっても，実際の活動をみるとかなりの分岐がみられる。このうち，活発に活動が展開されている教団をみるため，教団をいくつかにタイプ分けしておきたい。ここでは，信者及び教団の全体的な活動の程度と在日ブラジル人信者数が分類の基準となる（表3）。多ー少の区分けは聞き取りのデータに基づいた相対的な差を表すものでしかないが，後に見るように，教団の組織的な特性や方針の相違が活動に反映されることを示す点で意味を持つ。

第1は，在日ブラジル人信者数も多く活動も活発なグループで，生長の家と創価学会が該当する。第2は，在日ブラジル人信者数は少ないものの，活発に活動している崇教真光が該当する。第3は，信者数は多いものの活動は活発でない天理教やＰＬ教団が入る。第4は，霊友会，金光教，世界救世教のように信者数が少なく活動が活発でないグループである。以下では，それぞれのグループごとに，①在日ブラジル人信者数，②教団側の取り組み，③在日ブラジル人の集会の状況を中心に活動の概要をみていこう。

表3　在日ブラジル人に関する新宗教教団の類型

	活動＝多	活動＝少
在日信者数＝多	生長の家，創価学会	天理教，ＰＬ教団
在日信者数＝少	崇教真光	霊友会，金光教，世界救世教

3．活動が活発な教団の状況

（1）在日信者数が多い教団

(a) 生長の家

在日日系南米人の信者数は，行事への参加者から推定して少なくとも1500人以上はいるという。89年頃から在日ブラジル人からの問い合わせや自主的な集まりを開始したという情報が増加しており，その頃から信者数が増えたものと思われる。バブル崩壊以後は，比較的動きも落ちつき，急激な増加はみられない。

教団として在日ブラジル人に対する取り組みを開始したのは90年になる。それまでは信者の自発的な活動にまかされていたが，行事に参加する在日ブラジル人の要望に応える形で特別な取り組みを始めた。まず，生長の家が発行する書籍や雑誌をブラジルから取り寄せて日本で頒布しており，日本最大のポルトガル語新聞であるInternational Press紙に毎月広告を掲載している。次に，在日ブラジル人向けに生長の家を紹介するパンフレットを96年に制作し，6000部を配布した。さらに，個人指導と祈願という形で相談業務を行っている。

これ以外に集会も活発に行われている。講習会という年1回の最大の行事で，91年頃からポルトガル語の同時通訳を実施してきた(4)。これとは別に，在日ブラジル人が自主的に運営する年1回の行事があり，91年から東京都で続いてきたほか，95年には静岡県でも開催された(5)。合宿形式の練成会についても，96年8月に初めて在日ブラジル人のためにポルトガル語で開催された。さらに，本部が把握しているだけで信者の集まりが，東京，静岡（2ケ所），千葉，群馬，神奈川，大阪，岐阜，愛知（10ケ所）の8県で持たれるなど，新宗教のなかでは最大規模の活動が展開されている(6)。

(b) 創価学会

在日日系人信者の数は，最低でも1000人くらいはいるだろうが，多くても数千人で，正確にはわからないという。外国人専門の部局は存在せず，担当部局を設けるほどには大きな問題となっていない。

創価学会の場合，東京では多国籍の外国人集会があり，在日ブラジル人の集会は中部地方が中心になっている。中部で最初の活動は，91年の名古屋市で始まり，当時は滋賀，三重，富山，岐阜からも人が集まっていた。それが景気が悪くなって残業がなくなると，交通費をかけて遠方まで通う経済的な余裕がなくなったため，各地で分かれて集会を開くことになった。それから，浜松，豊橋（スペイン語），四日市，岐阜，掛川・島田（合同会合）という順番で集会

が生まれている[7]。このほか，ブラジル人メンバーのグループ全体で，文化祭を開催してコーラスなどを組織して参加する。

各都市で行われる集会の責任者は，ブラジルで幹部をしていた場合が多い。若い人は責任者にしてもすぐに交代したり場所を移ったりする。責任者は面接の上で決める。さらに中部地方全体を束ねる責任者が，壮年部，婦人部，男子部，女子部に各々存在し，副責任者を合わせて７人がルネサンス・グループと呼ばれ，こうした会合の設置や責任者を決定する[8]。

創価学会の特徴として，在日ブラジル人自身が積極的な組織化を進めていることが挙げられる。日本に来て創価学会から離れている信者を再び組織化するために，戸別訪問して参加を促す。所在がわからない場合には，ポルトガル語新聞に尋ね人を出したり，広告を出して学会員を探し出す。さらに，在日ブラジル人によって在日ブラジル人に対する布教も行われており，集会には毎回新たな参加者が含まれているという。このような組織化の形態は，創価学会の組織力の強さを反映しており興味深い。

（２）在日信者数が少ないもの

(c) 崇教真光

崇教真光では，各地の道場に通う外国人の数を把握している。関東地方には外国人が96年現在で370名おり，そのうち日系人が127名。92年100名，93年180名，94年200名と増加してきている。中部地方の信者は96年現在で200名くらい。それ以外の地方にいる外国人は少ない。道場に通う信者以外の人数は推定できないという。90年になって外国人が増加したため，各部局に外国人担当のコーディネーターを設けた[9]。コーディネーターに通訳も加わって，毎月勉強会を開いて情報交換をしている。

在日ブラジル人が最も多く集まるのは焼津市の道場であり，ブラジル人とペルー人を中心に93年頃から増加して，97年現在で40～50人くらいが道場に通っている。当初は数名だったが，ボリビア出身で２年間真光を探していたという信者が来てから，その信者を通じて一挙に増加した。それからは毎週のように新規参加者が道場に来ているという。96年には焼津の道場内で独立した単位として海外部を作った。

名古屋市の道場では，全ての行事でポルトガル語の通訳をつけている。外国

人の班ができており，ブラジル，ペルー，ニュージーランド，アメリカなど各国の出身者が20名以上通っていたが，現在では15名程度になっている。清水市，沼津市の道場でも南米出身者が参加している。沼津では，ペルー人でかなり日本語のできる人がリーダーになっており，全部で20名くらいが通っている。
崇教真光の特徴として，ブラジルで信者だったものよりも日本で研修を受けて信者になったケースが多い点が挙げられる。今，道場に通っている人は，ほとんどが日本で初めて来るようになっており，真光のことを人に来るまでほとんど知らなかった者が多いという。崇教真光は「お浄め」によるいやしを重視しており，心身の不調を訴えるブラジル人にアピールすることが，日本での新規参加者の増大の原因と思われる。

4．活動が少ない教団の状況

（1）在日信者数が多いもの

(d) 天理教

天理教では，信者として登録される際の要件が他の教団に比べて厳しい。聖地のある天理市で講習を受けて入信の儀式を終えた段階で正式な信者になる。以上を前提としたうえでいうと，ブラジル国内の正式な信者は5000人，信者全体では2～3万人だが，地域で活動している人はもっと多いという。この数値を元におおざっぱな推定をすると，日本在住のブラジル人信者は，2500人くらいで，正式な信者はその4分の1くらいと思われる。

また，組織的な特徴として，地域を基盤とした横のつながりより，布教した／された関係からなる縦のつながりの方が強い。天理教には大教会－分教会－布教所というヒエラルキーがあるが，この系列も，布教関係によるから地域を単位としていないことが多い。ブラジルには本部直轄のブラジル伝道庁があるが，伝道庁の下にある分教会は9ケ所しかない。全部で84分教会306布教所がブラジルにあるうちで，残りの分教会は日本にある大教会の下にある。そのため，一定地域でブラジル人信者が増えたからといって，地域で対応する基盤が整っているわけではない。

ブラジルではJournal TENRIという新聞を毎月12,000－13,000部程度発行している。これについては，在日日系人が増加する頃から，日本の本部がブラジルから取り寄せて，関係のある大教会に配布している。

集会としては年1回，5月のゴールデンウイークの時期に，ブラジル伝道庁が主催して「ブラジル教友おやさとの集い」を開催する。これは，就労目的で来日する信者の数が増加したため，多くの信者が聖地に帰り，互いの親睦を深める機会にしようとしたものである。91年に始まったこの集いには，毎年300－500名の信者が集まっている。地域社会レベルでの活動方法については，現在模索中だという[10]。

(e) パーフェクトリバティー（PL）教団

PL教団で各地の教会に通っている在日ブラジル人信者数は，270人くらいだという。この数字は，国内の名簿データによる。信者で日本に来ている人は，その十倍くらいいると思われる。分布としては，首都圏，静岡，埼玉，大阪に多い。このように所在が明らかになっている信者が，日本の組織と接触するきっかけは，出身地での縁故から教会を調べることがあるという。こうした信者に対しては，ブラジルの機関誌を取り寄せて日本で配布している。

日本での個人的な相談としては，生活上の悩み，心構えについて各地の教会が対応している。言葉の問題は何とかなっているという。言葉が一緒にできる人と一緒に来ることが多いし，布教師のうちでブラジルに出向してポルトガル語ができる人もいる。ただし，そういった布教師に相談を集約するよりも，問題があれば地元ですべて解決する。相談についても，ビザや労働などでの相談ではなく，あくまで教義を通して心の安寧を得るようにしている。宗教以外の話はしないし，救援活動もしていない。

そのため，グループ単位での活動はない。本部にある研修所にはブラジル人で参加している人が時折見られるが，グループで参加するわけではない。日本で信者を教会に引き戻すような活動はしておらず，各地の教会に対応をまかせているという。

（2）在日信者数が少ないもの

(f) 金光教

金光教は，ブラジルでそれほど多くの信者を獲得しているわけではない。ブラジルで伝道を始めてから30年くらいが経過しているが，ブラジルで新しい信者を獲得し始めたのは17年前になる。現在は，ブラジルで千人弱の信者がいる。

日系人の割合は，最も盛んに活動しているビリグイの教会で7割，サンパウロだと95%になる。ただ，ブラジルに4つある教会のうち2つは3年前に教会になっており，歴史が浅く信者と教会の結びつきはそれほど強くないという。日系人の信者が日本にどれくらいいるのかは全くわからないが，20家族程度についてはブラジル側から送られた名簿に基づいて住所を把握している。静岡，群馬，九州に数家族ずつくらいが分布している。

金光教では，93年に国際センターを設立している。もともとは，ブラジル布教のためのリーフレットや祈りの言葉の翻訳など，バックアップ的なことをするのが目的だった。国際センターにブラジル人の信者から連絡が来ることはあったが，教団側から働きかけることはなかった。教会に滞在して研修することはあっても，それは出稼ぎではなく研修が滞日目的になっていた。

その後ブラジル側からの要請があって，96年の7月から在日ブラジル人信者に連絡をとるようになった。現在では，ブラジル側の名簿により日本の住所を把握している家族には，ブラジルから送ってもらったニュースレターを国際センターから送っている。国際センターの職員がブラジルに行ったときに，日本に来ているブラジル人のケアを頼まれたことがきっかけとなって，ブラジルで発行されているニュースレターを送るようになった。とはいえ，日本にいるブラジル人に布教をしているわけではなく，広報を行っているわけでもない。

そうしたなかで，国際センターと地元の教会の共催で，97年8月に浜松でブラジル人との交流会を開催した。国際センターとしても，ニュースレターを送るだけでなく直接接触する機会を模索していたため，信者が比較的集中している浜松に会場を設けた。そのときに参加した信者と話して，信者同士の横のつながりもないことがわかったという。総じて言えば，金光教の取り組みは始まったばかりで，今後の対応を模索している段階にあるといえる。

(g) MOA

在日南米人のうち世界救世教の信者は多いときで500人，96年現在で300人くらいだと推定される。そのうち，何らかのMOAの活動を続けているのは30～50人くらい。ただしMOA自体は宗教団体ではなく，その傘下に世界救世教がある。ブラジル人の信者団体は日本にはない。ただ，名古屋，浜松，群馬といった拠点ではリーダー的な人が活動しており，ニュースレターを送っていた。し

かし，休みは日曜日だけなので，何かするといっても月１回程度しかできなかった。日本側の受け入れ体制もない。

ＭＯＡの最大の特徴は，情報誌の発行にある。以下で紹介するＭＯＡラテンアメリカ日系人協会も，世界救世教とは別の組織であり，ＭＯＡの活動は信者だけを対象にしているわけではない。この協会の設立は1991年９月にさかのぼる。当時は南米出身者が増加しており，日本からブラジルに多くの人が移民して世話になってきたため，お返しする意味を込めて情報誌を作ろうということになった。

情報誌を作るにあたっては，ポルトガル語のわかる日本人や出稼ぎに来ていたブラジルの人で有志を募った。ブラジルの組織から特に要請があったわけではなかった。同じ時期にスペイン語版も発行している。最初は発行・編集のためのノウハウはなく，壁新聞程度のものだった。スタッフは３名で，スタッフで話し合って内容を決めた。予算の都合でＡ４，８頁としてその範囲内で作成していた。

情報誌は当初OASYSという名前だった。当初の頃は，ポルトガル語の新聞もなかったため情報が絶対的に不足しており，それを補うために一般的な情報を提供していた。しかし，その後一般の新聞が出るにつれて94年からニュースレターのあり方を問い直す声が出始めたという。そのため，95年１月から主にＭＯＡのことを知らせる内容を中心にして，誌名もWorld Familyに変えた。World Familyでは，芸術など日本の文化関係，自然農法，浄霊といったことを紹介していた。World Familyも，しばらく発行も続けると発信する情報がなくなってきたため，96年４月には廃刊にした。

こうした情報誌は，各地のブラジルレストラン，国際交流協会，公共職業安定所，ブラジル銀行を通じて配布されていた。それ以外に，個人講読も多かった。ニュースレターに料金後納の葉書をつけて，それに連絡先を書いて送り返せば，すべて無料で郵送していた。93年のピーク時には，ポルトガル語が6000～7000部，スペイン語が3000部で合計１万部くらい発行していた。

お祭りとしては，92年のゴールデンウィークに伊豆半島の修善寺でシュラスコ（ブラジル風焼き肉）パーティーを開催したことがある。ブラジルとペルーの人が320人くらい集まったが，世界救世教の信者は１割程度とみられる。しかしこれも準備が大変で費用がかかるから，１回限りの行事となっている。

(h) 霊友会

在日南米人の信者数は100名程度とみられる。これは出身国での名簿をもとに日本に転居した信者を計数したものである。数の推移については不明であり，それを調べるだけの理由もないという。

在日外国人に対する支援活動は，92～96年まで行っていた。そのために南米会員交流課を本部の国際局のなかに設立し，ブラジルの青年部から専従者を招聘して雇用していた。これは，ブラジル側で日本への出稼ぎ者に対する取り組みの要請を受けて始めたものである。この支援活動は，日本での生活で生じる障害をなくすことを目的としており，信者の宗教活動を助けるためのものではなかった。

具体的な取り組みとしては，次のことを行っていた。まず，生活上の問題に関する相談を受け付けるフリーダイヤルを設け，パンフレットを作ってブラジルに送って情報を流した。受けつける相談は，賃金や労働に関するものも含まれる。次に，機関誌を発行した。平均100部，ピーク時には500部以上を印刷し，名簿で把握している会員に直接送付したほか，ブラジルレストランを通じて配布した。

最後に，信者同士の横のつながりを作るために集会を開催した。まず，93年くらいから名古屋市で「直接交流」という組織を作って集会を開いた。当初は約50名が集まったが，信者以外の人も多くいた。このほかにも日本語教室や生け花教室を開いた。名古屋では不定期にボランティア活動もしていた。94年には福山市でも直接交流の集まりを開き，30人くらいが集まり，日本語教室も開いた。 霊友会で特徴的なこととして，本部からの支援目的を生活上の問題解決に絞っている点を挙げることができる。信仰上の活動は布教した／された関係に基づいており，本部は介入しない。逆に，在日ブラジル人に対する活動については本部の交流課が行い，名古屋や福山の支局は介入していない。また，当初は個人の支援を行っていたが，組織ができてくるとより効率的な組織支援に重点を移すようになった。さらにバブル崩壊で人数が減少し，長期滞在者が増加すると支援の必要性が低下していったという。そのため，96年には生活不自由の支援は必要ないとして，名古屋と福山の両方で支援活動を停止した。それ以降の活動については，本部では把握していない。

5．相違を生み出す要因

このように，新宗教教団の間でも活動状況はさまざまである。その要因は一概にはいえないが，ここでは重要なものとして，①信者数，②組織形態，③教団側の方針や教義上の特性の3つがあると考える。稿を終えるに当たって順に検討していこう。

第1に，信者数は多い教団で数千人，少ない教団で百人単位となっている。教団によって信者の基準も異なり，実態がほとんど明らかになっていない状態での推定ではあるが，活動状況をみるのに一定の意味を持つ。日系新宗教のうちブラジルで最も多くの信者を擁するのは生長の家であり，教義書の販売部数から出した数値で240万人に達する（日本移民80年編纂委員会編，1991：436)。日本での推定信者数は，教義書の販売部数ではなく集会への参加者を基準としているため，かなり活動実態に近い値となっている。一方，世界救世教はブラジルで生長の家につぐ規模を誇るが，非日系の信者が95％を占めているため(松岡，1993：122)，在日ブラジル人信者は少ない。金光教はさらに人数が少ないため，在日ブラジル人独自の集会を開催するに至っていない。

しかし，それだけでは活動状況の相違を説明できないため，第2の組織形態を考慮する必要がある[11]。地域単位の組織が強い創価学会に対して，宗教上の親子関係が中心で地域組織が弱い天理教，霊友会，ＰＬ教団では，ブラジル人の居住が地域レベルの取り組みにつながりにくい。また，ＭＯＡは信者の家庭を1つのブランチという単位にしており，集権度が高いわけではないから，集団が形成されにくい。

第3に，教団の方針や教義上の特性も大きく影響する。生長の家と創価学会では，ブラジルで幹部だった信者が中心になって日本での組織化を進めている。崇教真光で活動が活発な理由は2つ考えられる。1つはコーディネーターの設置や翻訳の充実などの積極的な対応で，もう1つはお浄めを通じて日本で初めて教団と接点を持ったブラジル人信者が多いことである[12]。ＰＬ教団の場合，在日ブラジル人信者は多くても，集団は形成されていない。ブラジル人は教会への帰属にこだわらないため，特に教会に引き戻すような活動もしていないという。霊友会は，支援の目的を生活上の問題への対処に限定したため，居住の長期化が進んだ段階で組織化を中止している。

以上挙げた要因の詳しい検証のためには，個々の教団での組織化のあり方を

細かくみていく必要がある。さらに，こうした組織的展開の持つ可能性を，コミュニティ全体の文脈において位置付けることも重要だろう。これまで，在日ブラジル人の宗教は宗教研究者ではなく外国人労働者研究の側から存在が指摘されてきた。今後は，より宗教社会学的な観点からの専門的な研究が必要であるとともに，外国人コミュニティ研究の側からも積極的に宗教にアプローチすることが求められる。

〔注〕

（1）　在日ブラジル人に関してイシ（1995）の調査報告があるほかは，宗教をテーマとした論文はみられない。フィリピン人に関していえば，キリスト教関係者による報告がいくつかある。

（2）　日系宗教といっても，本願寺派のような既成仏教や稲荷会のようなブラジル生まれの新宗教も含まれる。

（3）　カトリックは，新宗教よりもさらに多くの地域でミサを執り行っており，東海地方を中心に，97年現在で全国40ケ所でポルトガル語のミサを行っている。在日ブラジル人については，ブラジルから神父を招聘してブラジル人信徒の司牧に当たっている。こうした神父はブラジル人のために各地でミサを行うほか，日常的な相談に乗ったり，年2回の大規模なカテキズム（教義問答）を開催している。ブラジル人のための専従聖職者がおり，また組織自体の社会的な活動が活発である点で，カトリックは新宗教とは異なる。

（4）　95年には，茨城，千葉，神奈川，東京第一，東京第二，長野，愛知，大阪，広島の9会場で同時に通訳が設置された。

（5）　東京の参加人数は，91年＝125名，92年＝273名，93年＝344名，94年＝334名，95年＝211名で，静岡の参加人数は95年＝140名となっている。

（6）　これは，イシ（1995）が生長の家を調査した94年のデータよりもさらに活動が増加したことを示しており，裾野の広がりを窺わせる。

（7）　このうち筆者が集会に参加した浜松でブラジル人の集まりができたのは，94年2月だった。当初はペルー人も出ており，浜松のみがポルトガル語圏とスペイン語圏の両方の人が出席していたが，スペイン語は95年頃から豊橋に移った。最初は，ペルー人7人，ウルグアイ人2人，それとブラジル人が30人くらいだった。当初は浜松で静岡県全体の集会を開いており，100人以上集まることもあった。そのうち7割は日本人の座談会に参加していたのが，言葉がわからないから自然に足が遠のいていったという。

（8）　ルネサンス・グループには，各会合の責任者よりさらに上級の幹部が入っている。筆者がインタビューした幹部の1人は，サンパウロ副支部長だった。

(9) 中核メンバーは数十名だが，末端の支部まで含めればかなりの数になるという。

(10) 在日ブラジル人人口が日本で最も多い都市である浜松市の分教会でのインタビューでも，ブラジル人の増加は，地元の教会に特に影響を及ぼしていないといわれた。

(11) これは新宗教研究における「おやこモデル」と「なかまモデル」の問題になる。

(12) 筆者がインタビューした信者のほとんどは，心身の不調を癒す目的で真光と接点を持っている。ただし，この点に関して十分議論を展開するには信者に対して本格的なサーベイを行う必要がある。

引用文献

ブラジル日本移民80年史編纂委員会編 1991『ブラジル日本移民八十年史』ブラジル日本文化協会.

樋口直人 1997「宗教」駒井洋他編『新来・定住外国人がわかる事典』明石書店.

井上順孝他編 1994「新宗教事典［縮刷版］』弘文堂.

イシ，アンジェロ 1995「日系ブラジル人出稼ぎ者と宗教――生長の家とキリスト教福音派を中心に」渡辺雅子編『共同研究　出稼ぎ日系ブラジル人（上）論文篇』明石書店.

前山隆 1997a『異邦に「日本」を祀る』お茶の水書房.

前山隆 1997b『エスニシティと日系ブラジル人』お茶の水書房.

松岡秀明 1993「日系新宗教への回心――ブラジル世界救世教の場合」『宗教研究』297号.

Warner, R. S. 1993 Work in Progress Toward a New Paradigm for the Sociological Study of Religion in the United States, *American Journal of Sociology* 98 : 1044－93.

（付記）調査にあたっては，各教団関係者から多大な協力を得た。記して感謝したい。ブラジルにおける日系宗教に関する文献を収集するにあたって，高橋幸恵氏の助力を得た。また，本稿は松下国際財団及び日本経済研究奨励財団の助成による研究成果である。